九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「貴重古医書コレクションの点描」

Michel, Wolfgang
Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

大島, 明秀
九州大学比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/3283

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2005/2006, pp.30-35, 2006-06-01. 九州大学附属図書館研究開発室
バージョン：
権利関係：

研究ノート

「貴重古医書コレクションの点描」

Wolfgang Michel*，大島明秀*

（甲）医学分館所蔵の初期紅毛流外科関係の資料

W・ミヒェル

８代将軍吉宗以降の西洋医学受容に関する研究は盛んであるが、17世紀の日欧交流における同様な動きに着目する研究者は比較的少ない。この現象の根源を追求すると、近代の蘭学観に大きな影響を与えた大槻玄沢の『蘭学階梯』（1783年成立）及び杉田玄白の回想録『蘭学事始』（1815年完成）が浮上してくる。特に蘭学発達の歩みを綴った玄白は「艫舵なき船の大海に」乗り出した自分たちの功績を強調し、以前からの長崎の阿蘭陀通詞や医師たちによる寄与については「初歩的な試み」として描写しただけだった。また、現存史料の状況も研究者の関心を左右していると思われる。17世紀の写本の多くは後世のものと混ざってしまい、それぞれの原型を定めるのは困難をきわめる作業である。さらに、1801年に訳語として誕生した「鎖国」という言葉の影響も見過ごしてはならない[1]。「鎖国政策」を打ち出した幕府は1640年代以降当分の間、ヨーロッパとの科学技術交流を促進するよりも、体制の安定化及び外来の影響の抑制を優先したという内向きのイメージを抱きがちであるが、オランダ東インド会社の豊富な記録を踏まえて調べると、実際には大目付や老中の一部など、幕府の高級官吏が先頭に立ち、兵学、植物学、薬学、医学、天文学、測量術などの西洋の有用な情報・技術とモノを取り入れようとした時期が見えてくる[2]。鎖国時代の調査を日・欧・中という国際的な史料文脈の中で進めていくと、以前認識できなかった現象が現れたり、国内の史料の位置づけも行いやすくなる。

医学分館の貴重図書コレクションには、17世紀の日本における西洋医学・薬学を反映する幾つかの写本が含まれている。

「阿蘭陀外科書」

寛政８（1796）年写、巻頭に「常平書」とあり、１冊、請求記号：古医書/オ-29。

この写本は1649年にオランダ東インド会社の特使フリジウスと共に来日し、翌年１月から10月までの江戸滞在中に、大目付井上筑後守政重の推薦で幕府の関係者の治療にあたりながら外科学に関する教授を行い、いわゆる紅毛流外科の史上初の元祖となったカスパル（Caspar Schamberger, 1623-1706）に遡る史料である。題目は様々であるが、同様の内容のものは約20篇を確認できた。その一部は慶安３年の日付、

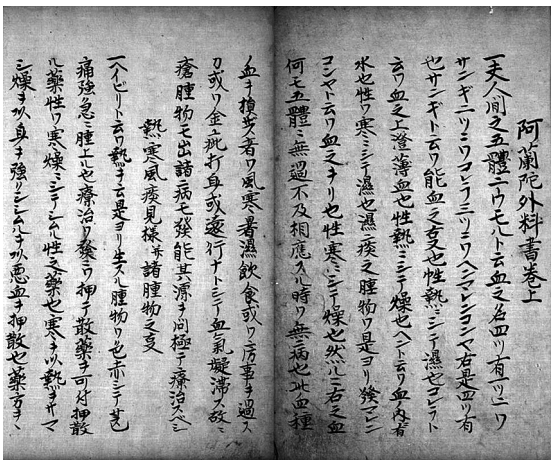
阿蘭陀外科書巻上

図１「阿蘭陀外科書」の体液論

カスパルの通詞猪股伝兵衛の名及び出島商館長の業務日誌と一致する記述を示しているので、

*うぉるふがんぐ　みひぇる　言語文化研究院・教授　E-mail: michel@flc.kyushu-u.ac.jp
*おおしま　あきひで　比較社会文化学府

本来の姿がほぼ完全に復元できる[3]。天文学、兵学の写本と同様に17世紀の医学文書の多くは18世紀後半から19世紀の20年代まで繰り返し「リサイクル」された。医学分館の写本は猪股伝兵衛の報告書をきれいに反映しているが、医薬品や治療例に関する部分は省かれている。反面では、多くの写者が無視した理解しにくい体液病理学の章を取り入れている。この写本はカスパル流外科の普及において大きな役割を果たした唐津土井藩（後ほど、下総国古河藩へ移封）の医師河口良庵に遡る可能性が極めて高い。

「阿蘭陀外科類方」（外題「阿蘭陀外科正伝」）

上巻、［書写地不明］：［書写者不明］、請求記号：古医書/オ-37。

カスパル・シャムベルゲルの離日後、出島商館長の江戸参府に随行する外科医たちの江戸滞在期間が短かったため、西洋医学に強い関心を寄せた大目付井上筑後守は1656年、長崎奉行黒川与兵衛に「人が一般にかかる病気に関する薬の調合についての長い覚書」を送らせている。その結果として長崎で孔子廟を設けて祭主を務める著名な儒医向井元升（玄松）が、商館長ブヘリヨンに渡された覚書に基づいて「医学と薬品数種の調合法を伝授された」ことになっている。これに関連する一連の作業は一年以上も続き、関係者に大きな負担となった。元升が出島蘭館を訪ねるたびに、オランダ語も医学もまだあまりわからない「阿蘭陀通詞」全員が翻訳をめぐり論争したようである。商館長ワーゲネルが1657年に江戸へ持参した文書は明暦の大火で灰となったが、元升の写しに基づいて、その改訂版が江戸へ送られた。

『西洋医術伝来史』と『長崎洋学史』において、上記の背景を認識していなかった古賀十二郎は、向井元升が明暦２・３年に外科医「アンスヨレアン」から受けた教授を「紅毛流外科秘要」としてまとめたと述べているが[4]、その写本の所在と内容が今日まで不明であるにも関わらず、あらゆる年表、事典、論文で取り上げられるようになった。

医学分館所蔵の「阿蘭陀外科類方」（外題は「阿蘭陀外科正伝」）は泌尿器科が昭和15年に購入した５冊の写本の一つで、膏薬、軟薬、薬油及び薬草を中心とする16丁のものとして内容的にさほど珍しくはなさそうだが、1657年１月14日付の出島商館日誌が描写しているとおり、当時のドイツ人外科医Hans Hanckeと同胞の商館長Zacharias Wagenerによる「署名」が巻末に見られる（図２）[5]。

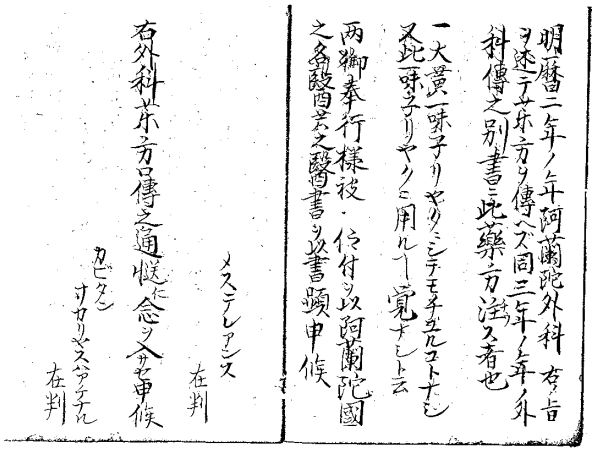

図２「阿蘭陀外科類方」の巻末

「阿蘭陀外科類方」は向井元升及び署名の件を述べたワーゲネルの名称を示す唯一の資料である。下巻の行方は不明であるが、東インド会社の文献により裏付けられた資料として「阿蘭陀外科類方」の上巻は、向井元升が撰した文書の原形を定める上でも、またその他の文書の発見とその位置づけを推し進める上でも今後最も重要な手掛かりになるに違いない。しかし、内容的に類似するその他の写本はなかなか確認できなかった。通詞が作成した報告の写しは多いものの、向井元升が一人でまとめた文書はあまり普及しなかったようだ。

筆者が昨年大阪の古書店で入手した写本により、元升の報告へさらに一歩近づくことになった。「阿蘭陀外科医方」（上下２巻、１冊）の下巻末には興味深い後書きが見られる。

「右阿蘭陀傳之醫書上下巻阿
蘭陀外科メステルアンスヨレアン口傳[6]
之通以吟味向井玄松立合和ヶ
申候右通事中竒合和之通慥
承申候
　明暦三乙酉歳

十月　日　　向井玄松［判形有］
馬田九郎左衛門
志築孫兵衛
名村八左右衛門
石橋助左右衛門
西　吉兵衛
横山與三右衛門
馬田七兵衛
富永仁兵衛」

明暦３年の10月１日は西暦の11月６日にあたる。最初に提出した文書が同年の春に江戸で焼失したので、これはオランダ側の資料が言及している二つめの報告書に違いない。商館長日誌によれば、向井玄升、出島の乙名と通詞たちはまさに11月６日に出島を訪れ、奉行の名において改めて医書を編集するための外科医の協力を求めた。今回の教授は同月の26日に終了したので、その報告書は前回の単なる改訂版であったと思われる。さらに付録としては「長崎町薬屋江阿蘭陀外科并玄松通事共参吟味仕知申候薬種事」があり、34の生薬名が紹介されている。この調査に関しては商館長ワーゲネルが業務日誌に1656年12月12日付で詳細に説明している[7]。興味深いことにこの写本の奥書にカスパル流外科を広めた「肥陽晩孝　　河口良菴春益」の名が記載されており、彼がシャムベルゲル以降の西洋医学に寄せた関心の強さを物語っている。

さらなる資料の発見が待たれるが、「阿蘭陀外科類方」の内容は「阿蘭陀外科医方」に含まれており、日付、関係者の名前、オランダ側の記述との整合性など、多くの点において両方の写本は互いに補い合うものとして、信憑性の高い資料であると位置づけてよい。

「阿蘭陀油道具寸法之圖并煎方書」

和装本、［書写地不明］：賤嶽臥鼎（写）、文化5（1808）年、請求記号：古医書/オ-32。

この写本は上記の阿蘭陀外科書と同様に江戸後期に作成されたが、13丁の記述が裏付けるように寛文12年の資料に基づくものである。出島商館日記によれば、1668年に両長崎奉行は交代する出島商館長に対し、将軍の名において蒸留器や薬草の種と苗の提供、及び製油技術と薬草の専門家の派遣を要請していた。その後数回繰り返されたバタビア総督宛ての要求に対し、東インド会社は二人の薬剤師を日本に送り込み、1671年にオランダから取り寄せられた大型蒸留装置も納入した。幕府の経費で出島に建設された油取家の姿は、通詞本木庄大夫良意の出島図に確認できる。1672年の春、薬剤師フランス・ブラウン（Frans Braun）は蒸留技術を披露し、献上品として江戸へ運ばれた一連の薬油を製造した[8]。７人の通詞が同年３月にまとめた報告書は釜、各種容器、銅製の冷却管、冷却用の樽等々の絵図を含め、蒸留過程を描写するものである。ブラウンに学んだ日本人は短期間で彼の蒸留技術を修得したが、輸入された薬草の栽培はうまくいかなかったので、薬油の生産サイクルを確立するには至らなかった。出島での蒸留装置は1680年代にも日本人により利用されたにもかかわらず、５代将軍綱吉の即位後幕府の熱意は失われ、この画期的な技術移転の試みは中途半端なかたちで終わってしまった。当時の通詞たちが作成した報告は少なくとも三つの流れで広まり、楢林家の場合、当時の他の資料と組み合わされ、色付の巻物と写本（「紅夷外科宗伝」など）として後世の人々の目を楽しませた。また、この蒸留器は千野元達が文化２（1805）年に京都で刊行した『和蘭制劑』にも利用された[9]。

医学分館の写本は当初の文書の薬の90%を反映しており、蒸留器の絵図も大変きれいにできている。奥書は以下のとおりである。

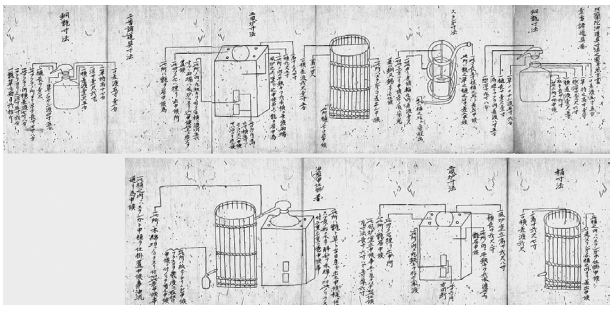

図３　蒸留装置全体像（「阿蘭陀油道具寸法之圖并煎方書」）

「右御藥油阿蘭陀人ニ被為仰付於長崎出嶋
于時寛文十二年壬子正月初八日ニ始煎三月九
日ニ祥仕廻申候依此圖者油秘術之一理永々
為證文如此御座候能毒書ハ阿蘭陀人之候
條別紙ニ御座候終」

同型の写本の中でも大変よい状態を保っており、附属図書館の古医書画像データベースで公開されている。

（乙）医学分館所蔵の出島版ポンペ著書について

大島　明秀

前近代の日本における活字印刷といえば、李氏朝鮮から伝わった古活字、イエズス会士が持参した活字機により刊行されたいわゆるキリシタン版、あるいは寺社蔵版などにしばしば見られる近世木活字がある。それ以外のものとして、今日ほとんど認識されていない「出島版」と呼ばれる書籍も存在する。きわめて残存数が少ない版であるが、九州大学附属図書館医学分館にも１冊所蔵されている。

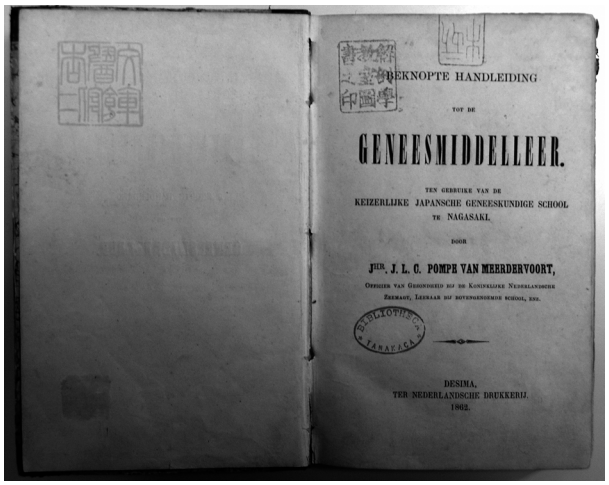

図４　扉。下方には「DESIMA ［//］ TER NEDERLANDSCHE DRUKKERIJ ［//］ 1862.」と刷られている。

九州大学大学院言語文化研究院ミヒェル教授が中心となって、2000年度から大学内の貴重古医書の調査・整理・目録作成が着手されたが[10]、2002年夏、解剖学教室（柴田洋三郎教授）より、凡そ200点（700冊）の古和漢籍が寄贈された。その中に「出島版ポンペ藥物書」との付箋が貼り付けられた黒帙に納められた洋書が混じっていた。その書名は蘭文で、書誌は以下の通りである。

Johannes Lidyus Catherines Pompe van Meerdervoort : *Beknopte handleiding tot de geneesmiddelleer: ten gebruike van de keizerlijke japansche geneeskundige school te Nagasaki*, Nederlandsche drukkerij, Desima, 1862. 20cm, 382p. 洋装本、活版。[11]　（ポンペ『長崎における王立日本医学校用の薬学を教えるための簡潔な手引き』、オランダ印刷所、出島、1862年）。請求記号：古医書/テ-19。

本書の扉やその次の頁に「杏仁醫館文庫」、「BIBLIOTHECA TANAKACA」および「長崎海關管事檢印」の朱印が捺してあるが、いずれも不明である。

著者のポンペ（1829－1908）は、安政４年（1857）に幕府から第二次海軍伝習所医官として招かれたオランダの海軍軍医で、５年に渡る在日期間中に、幕府医官松本良順をはじめとする医学生に、日本で初めて化学・人体解剖・臨床医学講義など体系的なカリキュラムの下に西洋医学教育を行った。また、日本における最初の近代病院でもあり、長崎大学医学部の原点ともなった長崎養生所の建設を要請した人物でもある。ポンペがそこで薬物学の講義を行うにあたって、オランダ語の要綱を準備し、出島で印刷したのが本書である[12]。

さて、「出島版」とは長崎西役所版、（長崎）江戸町版、出島版、出島オランダ印刷所版の４種をまとめてそう呼ぶ。安政２年（1855）６月長崎奉行荒尾岩見守成允と海軍伝習方総取締永井玄蕃頭尚志の連名で、阿部伊勢守に「阿蘭陀活字版蘭書摺立方」についての上申書が提出された。その趣旨は、過去に蘭人が輸入した蘭書活字板を許可を得て阿蘭陀通詞が語学修行の便のため所持しているが、それを長崎会所銀で買い上げ、奉行所で必要な蘭書を印刷し、長崎会所で一般希望者に売れば世上の便利になるだろ

うというものであった。そういった経緯で活字板摺立所が西役所内に設置され復刻版蘭書を刊行していたが、安政４年（1857）活版印刷技師インデルマウル（G. Indermaur）が来日、新印刷機械、活字、用紙などを持参した。西役所版は復刻版でないものも印刷するようになり、同年活字板摺立所が出島に移転、安政６年か万延元年（1861）あたりに出島オランダ印刷所に変わった。具体的に出島のどの建物が印刷所であったのかを突き止めることは難しいが、いずれにせよ長崎から出島に移転してから７種の洋書（それ以前は８種）が刊行されたことが認められている。その一つが上記に挙げたポンペ著書であり、興味深いことに本書が刊行された1862年以降に成された「出島版」は現在まで確認されていない。出島オランダ印刷所の終わりは定かではないが、現時点でこのポンペ著書は、最後の「出島版」と考えられる文献である[13]。

管見の限り、香川大学１点、天理大学２点、千葉大学医学部１点、長崎歴史文化博物館１点、国際日本文化研究センター１点、個人所蔵数点が現在までに認められているが[14]、医学分館所蔵書はそれに並ぶものであり、希少性の高い資料であることが改めて確認できる。どのような経緯で解剖学教室が所蔵するに到ったのかについては、今後さらなる調査が必要である。

参考文献

［１］詳細については、大島明秀「『異人恐怖伝』に見られる国学者黒沢翁満の『鎖国論』受容」、『日本文芸研究』第56巻２号（2004年）、「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」『日本文芸研究』第57巻１号（2005年）、及び「近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容」『洋学』第14号（2006年）を参照。

［２］Wolfgang Michel: Western Medicine and Pharmaceutics in Seventeenth Century Japan. Proceedings of the Tenth International Conference on the History of Science in East Asia. Shanghai Jiao Tong University Press, 2005, pp.173-184.

［３］ヴォルフガング・ミヒェル「カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科（I）」『日本医史学雑誌』第42第3号（1996年）、41～65頁。ヴォルフガング・ミヒェル「カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科（II）」『日本医史学雑誌』第42巻第4号（1996年）、21～45頁。

［４］古賀十二郎『西洋医術伝来史』形成社、東京、昭和47（1972）年、66～67頁、74～75頁。古賀十二郎『長崎洋学史』下巻、長崎文献社、長崎、昭和48（1973）年、165～167頁、171～173頁。

［５］詳細については、ヴォルフガング・ミヒェル「九州大学蔵の「阿蘭陀外科類方」（阿蘭陀外科正伝）と向井元升について」『比較社会文化研究科紀要』第2号（1996年）、75～79頁を参照。

［６］meester Hans Jurian （= Hans Jurian Hancke）

［７］出島商館日記（1656年12月12日）オランダ国立文書館、NFJ no. 70。詳細については、ヴォルフガング・ミヒェル「出島蘭館医アンス・ユリアム・ハンコについて」。『言文論究』第７号（1996年）、83～96頁参照。

［８］詳細についてはWolfgang Michel, Elke Werger-Klein: Drop by Drop - The Introduction of Western Distillation Techniques into Seventeenth-Century Japan『日本医史学雑誌』第50巻第4号（2004年）、463～492頁を参照。

［９］医学分館貴重図書コレクション、オ-87。

［10］Wolfgang Michel「医学分館所蔵貴重古医書のデータベース化及び医史学的、書誌学的な調査研究」（『研究開発室の活動報告平成14年度』、ヴォルフガング・ミヒェル「九州大学附属図書館医学分館貴重古医書コレクション及び古医書画像資料データベースの案内」（『日本医史学雑誌』第49巻3号、4号、2003年所収）、463～492頁を参照。

［11］邦訳は筆者が行った。本書について、神崎順一は『長崎における日本王立医学校用薬学指南』とし、『洋学史事典』は『長崎における王立日本医学校用薬学指南』と訳している。神崎順一「天理図書館所蔵の長崎

版並びに出島版について」（『ビブリア』第103号、天理、1995年所収）138頁。日蘭学会編『洋学史事典』（雄松堂出版、東京、1984年）471頁。

［12］ポンペについては、友永得郎［ほか］編『ポンペ略伝並びに長崎大学医学部沿革略』（西洋医学教育発祥百年記念会事業部、1957年）。宮永孝『ポンペ：日本近代医学の父』（筑摩書房、1985年）、ポンペ『長崎における王立日本医学校用の薬学を教えるための簡潔な手引き』については、佐藤恒二「ポンペ著出島和蘭印刷所出版『薬物書』」（『日本医史学雑誌』復刊12、第856号、233、1939年）、緒方富雄「佐藤恒二博士『ポンペ著出島和蘭印刷所出版『薬物書』』への追加」（『日本医史学雑誌』復刊12、49、1939年）および岩熊哲「出島版ポンペ著薬物学書に就いて」（『日本医史学雑誌』復刊12、422、1939年）参照。

［13］川田久長「オランダ伝来の活版術」（『蘭学資料研究会研究報告』第73号、蘭学資料研究会、東京、1960年所収）３～６頁、前掲神崎順一「天理図書館所蔵の長崎版並びに出島版について」155～158頁、および前掲『洋学史事典』470頁参照。なお同書470～471頁には、15種の「出島版」について付表が掲載されている。

［14］前掲『洋学史事典』471頁参照。